

称号及び氏名 博士(看護学) 小代 仁美

学位授与の日付 平成27年9月25日

論文名 小児看護学実習初期における「子どもとの関係アセスメント尺度」の開発

論文審査委員 主査 檜木野 裕美

副査 中山 美由紀

副査 細田 泰子

論文内容の要旨

【目的】

小児看護学実習初期に学生が子どもとの関係をアセスメントする子どもとの関係アセスメント尺度の開発を目的とした。また、尺度活用に関する検討をした。

【方法】 1から3の3段階の方法で尺度開発し、4の方法で尺度活用を検討した。

1. 尺度原案の作成：小児看護学実習初期における学生の子どもとの関係に関する概念分析及び文献検討，教員を対象とした質的研究(予備研究1)結果を基に尺度原案を作成した。

2. 尺度原案の内容妥当性・表面妥当性の検証(予備研究2・本研究1)：専門家(予備研究2)と看護系大学の学生(本研究1)を対象に内容妥当性・表面妥当性を検証し，その結果に基づき尺度原案の項目の修正をした。1) 予備研究2：看護系大学の教員11名を対象とした郵送法による質問紙調査を行い，Content Validity Index (CVI) と項目の内容の過不足及び表現に関する意見を得た。調査は大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を得た。2) 本研究1：便宜的に抽出した1看護系大学学生(4年次生)8名を対象に4名ずつのグループインタビューを60分程度行い，項目の文章表現が理解できるか，内容は妥当か，追加項目について意見を得た。調査は大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を得た。3) 尺度項目の修正：予備研究2及び本研究1の結果に基づき項目修正を検討した。

3. 尺度項目の決定および尺度の信頼性・妥当性の検証(本研究2)：全国の看護系大学13校の学生1132名を対象に郵送法による質問紙調査を行った。調査内容は，子どもとの関係アセスメント尺度，他者理解尺度，学習活動自己評価尺度-看護学実習用である。分析方法として，項目分析，探索的因子分析をして尺度項目の選定をして，尺度の信頼性はCronbachの α 係数，尺度の妥当性は，併存妥当性の外部基準(他者理解尺度，学習活動自

己評価尺度-看護学実習用)との相関分析をした。調査は大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を得た。

4. 尺度活用の検討(本研究3):本研究2・3の両方に回答した157名の学生を対象に郵送法による質問紙調査を行った。調査内容は、看護実践力尺度、小児看護学実習達成感ビジュアルアナログスケール(以下 実習達成感スケール)、尺度に対する意見の記述である。分析方法は、各尺度とは相関分析、自由記述は質的分析をした。調査は大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を得た。

【結果】

1. 尺度原案の作成;4下位尺度58項目(6段階リッカート法)の尺度原案を作成した。

2. 尺度原案の内容妥当性・表面妥当性の検証(予備研究2・本研究1):1)予備研究2:CVI 0.6~1(削除基準0.8未満は7項目)であった。項目の追加に関する意見は、15項目であり、項目の表現や内容について、学生が解釈するには難しい、実習初期での回答が困難という意見(113件)があった。2)本研究1:項目の表現や内容について、実習初期の回答では高度、質問内容に複数の内容が含まれるという意見(85件)があった。3)尺度項目の修正:尺度原案の58項目のうち11項目を削除、8項目追加し、4下位尺度55項目の尺度を作成した。

3. 尺度項目の決定及び尺度の信頼性・妥当性の検証(本研究2):回答を得た235部(回収率21%)のうち有効回答190部(有効回答率81%)を分析対象とした。項目分析及び探索的因子分析(主因子法、Promax回転)により、25項目を削除し、3下位尺度30項目の尺度を作成した。信頼性では、Cronbachの α 係数0.758~0.920であった。妥当性では、他者理解尺度との相関は、 $\rho=0.191\sim0.454$ ($p<0.01$)。学習活動自己評価尺度-看護学実習用との相関は、 $\rho=0.197\sim0.509$ ($p<0.01$)であった。

4. 尺度活用の検討(本研究3):回答を得た157部のうち有効回答150部を分析対象とした。本尺度と看護実践力尺度との相関は、 $\rho=0.325$ ($p<0.01$)、本尺度の下位尺度と看護実践力尺度との相関は、 $\rho=0.213\sim0.346$ ($p<0.01$)であった。下位尺度(子どもを理解した関係づくり)と実習達成感スケールとの相関は、 $\rho=0.172$ ($p<0.05$)であった。また、関係づくりの視点に気づいた等の意見(62件)があった。

【考察】

尺度原案の内容妥当性・表面妥当性の検証(予備研究2・本研究1):予備研究2の結果より、約9割の項目がCVI 0.8以上であり内容妥当性があると考えた。CVIが0.8未満の7項目は削除とした。項目の内容や表現は、予備研究2及び本研究1の結果と統合して、学

生が回答しやすい内容，解釈しやすい表現へと修正が必要と考えた。

尺度項目の決定および尺度の信頼性・妥当性の検証（本研究 2）：Cronbach の α 係数が高く，内的整合性があると考えた。また，外部基準との有意な正の相関があり，併存妥当性があると考えた。

尺度活用の検討（本研究 3）：本尺度と看護実践力尺度，〈子どもを理解した関係づくり〉と達成感スケールは有意な正の相関を示し，学生が子どもとの関係をアセスメントすることは看護実践力に関係し，子どもを理解してかかわることは達成感に繋がることはいえる。このことより，実習初期に学生が子どもとの関係をアセスメントすることの有用性から尺度活用の可能性があると考えた。

キーワード：看護学生，アセスメント，小児看護学実習初期，子どもとの関係

学位論文審査結果の要旨

小児看護において、さまざまな発達段階にある子どもとの関係を築き、子どもの持てる力を引き出す看護実践をしていくことが求められ、その看護実践能力は、看護学生（以下、学生とする）の頃から培っていかなくてはならない。しかし人間関係を円滑に進める能力の不足が指摘されている。そこで、学生が実習の早い段階から子どもや学生を取り巻く状況を含めた子どもとの関係をアセスメントし、子どもとの関係の状況を認識し、子どもへのかかわり方をどのようにするか学生自身で考えながらかかわりを積み重ね、子どもとの関係づくりをしていくことができれば、看護実践能力を養うことに繋がる。本研究の目的は、小児看護学実習初期に学生が子どもとの関係をアセスメントする子どもとの関係アセスメント尺度の開発し、その尺度活用に関する検討を行うことであった。研究方法は、尺度原案の作成、尺度原案の内容妥当性・表面妥当性の検証、尺度項目の決定及び信頼性・妥当性の検証の3段階で尺度を開発し、尺度活用に関する調査を行った。開発した尺度は、3下位尺度30項目であり、尺度の信頼性では、Cronbachの α 係数が高く、内的整合性があると考えられた。妥当性では、外部基準との有意な正の相関があり、併存妥当性があると考えられた。尺度活用の検討では、本尺度と看護実践力尺度、〈子どもを理解したかかわり〉と実習の達成感とは有意な正の相関を示し、学生が子どもとの関係をアセスメントすることは看護実践力に関係し、子どもを理解してかかわることは達成感に繋がることが考えられた。学生が子どもとの関係をアセスメントすることの有用性から尺度活用の可能性や、さらに、教員が指導の際に活用できると考えられた。

本尺度は、小児看護学実習で学生が難しさを感じる子どもとの関係づくりを学生自身がアセスメントするため、また実習初期に着目して開発したものである。尺度開発の段階を丁寧に踏んでおり、小児看護学教育に用いることができる有用な尺度である。特に分析方法が適切であり、優れた論文で看護学研究の発展に寄与する学術的価値を有している。博士（看護学）論文として十分に価値があると審査委員全員一致で認めるものである。